

こうち

Kochi
Normalization

ノーマライゼーション

特集「障害のある人の防災」

みんな考えている

障害のある人の思い

支援する人の思い



高知県・障害のある人の防災ニーズ調査	1～2
高知県災害弱者支援センター準備室	3～4
障害のある当事者による活動	4～5
誰一人とり残したくない！地域の思い	5～8
高知市の避難行動要支援者対策	9
障害者福祉センター年間行事カレンダー＆ほっこりエピソード	10
ほんとうにあった障害者あるある 4 コマまんが	11



高知県障害者(児)福祉連合会長 武田廣一さんにインタビュー

高知県障害者(児)福祉連合会とは、障害団体の違いを超え高知県の障害福祉が充実することを目的として政策提言や職場環境調査や研修を行っています。高知県知的障害者福祉協会、高知県知的障害者施設家族会連合会、日本ダウン症協会・高知小鳩会支部、高知県自閉症協会、高知県精神障害者家族会連合会、社会福祉法人明成会が集まり、「高知県・障害のある人の防災ニーズ調査」を実施し、報告書をまとめ、県へ「障害のある人の防災避難についての提言」として報告を行いました。

高知県・障害のある人の防災ニーズ調査



「高知県・障害のある人の防災ニーズ調査」をしたきっかけ

▶当事者の意見を聞こう！

災害対策に関して、障害のある方が取り残されているのではないかと、その原因は、どこにあるかを知りたくて調査を行いました。防災マニュアルに当事者の意見が反映されているのだろうか。例えば要配慮者の名簿にしても、名簿作成の情報が伝わっていない。本人たちも名簿が作成され掲載されていることすら知らなかったり、あきらめている人が多いのが現状です。当事者の意見をまず聞こう！そこからではないか！そこから始まらなければならない。ということで「障害のある人の防災避難ニーズ調査」のためアンケートや意見交換会を行いました。

伝えるためにはどうしたらいいか

ポイント1 情報の伝え方の工夫が必要

障害によっては、情報を伝えること、こちらが情報を得ること自体の困難さがあります。『障害のある人たちに情報が伝わっていない』→『伝わるような伝え方をしていない』から・・・

情報を郵送しているだけでは伝わらないのです。調査の中でも、自分は読めないのに代読してくれる方に読んでもらうという方もいました。聴覚障害の方には、通訳者を通して目で見て分かるもので伝えるなどの工夫が必要です。「自助」の大切さを言われますが、情報が伝わり、さらに一緒に体験をしないとわからないことだと思います。具体的にどのような伝え方をすれば本当に伝わるのか考える必要があります。

ポイント2 「やさしい日本語」

災害に関する言葉は難しいですね。今は外国人の方もたくさんいます。漢字を見て理解できることもありますが、視覚障害の方にも小学生にも分かりやすい「やさしい日本語」で伝えることが大事。例えば「避難用具」、わからないですよ。



令和2年2月1日に「障害のある人も参加できる地域防災避難訓練」シンポジウムを開催

高知市に協力いただき、シンポジウムの参加者80名の内、約20名が自主防災会の方でした。全体の7割の方がアンケートに回答してくれました。アンケートの詳しい内容については、調査報告書に載っています。

▶訓練に参加することが先

要支援者には個別計画を作成して避難方法や、避難訓練に参加するといった流れになっているように思いますが、まずはここが一番大事で避難訓練に参加すること。参加し易くするためには、普段からのつながりが大事になります。

しかし普段からのつながりというのは簡単に作れるものではないのです。訓練に参加してもらう、参加し易い状況を作るためには、両者のハードルを下げていくような方法が必要だと思いが結論というか、我々の一つのステップとして具体的な目標になっています。地域の避難訓練に、まず参加することで「こういう人がおるね」とわかり、そこからつながりが見えてくる。ということを狙っています。

シンポジウム参加者の声を少しご紹介します

当事者家族 「防災に関して地域で相談しても
の声 なかなか相談に乗ってくれない。
わが子を一番先に助けて欲しいとは思っていません。地域に介助が必要な子がいるということを知ってほしい」

当事者本人 「コミュニケーションが難しいの
の声 でどうしたらいいですか？」
その場合「SOS」カードを持って、避難所で支援を得られるようにしてはどうでしょうか。と提案しました。

地域防災に係わっている人
の声 民生委員の負担が心配。何か全体の対策というものが大切ではないかと思えます。障害のある方がどのように考えているのか、伝え方の工夫が少しわかってきた。これから取り組んでいきたい。

「障害のある人の防災避難ニーズ調査」から見えてきたこと

▶地域だけではなく様々なところからの情報発信も必要

今回の調査では通所の事業所にも協力いただきました。

福祉事業所は長くて半日の方や週〇回という方もいらっしゃる。事業所も利用者に対して地域の個別計画ができていっているかどうか、現状もお聞きして、なおかつ地域の自主防災会の訓練のことを知っているかどうか、参加しているのかなど、地域の情報を一緒に調べることで地域に繋げていく方法も求められると思います。今後は、どこかだけではなく、いろいろなところからどのように情報を発信していくかが大事です。それがきっかけとなり地域に顔を出せる、ある時は一緒に参加できるようにとなると信じています。

家族構成や居住環境であきらめている人が多い

被災の恐れがあるところに約50%近くの方が、住んでいます。聴覚障がい、視覚障がいのある方とやり取りしながら分かったことは、高齢で一人暮らしの方が多くことです。

例えば、元気な家族がいれば一緒に逃げることができますが、老老介護ではないが、80の親と60の障害のある子供であった場合、もう「あきらめ」ている人が結構います。

当事者・家族
の声

「あきらめる」理由

「みんなも被災しているのに迷惑はかけられない」と思っています。「パニックになったら、親でないとなかなか対応ができない」「人に迷惑かけるから、それなら、家にいた方がいい」という考えになってしまうのです。

避難訓練に参加しない理由は

当事者・家族
の声

- 訓練があることを知らない
- 参加しづらい、地域との関係性が薄い
- 自分たちの地域に実際に障害者がいるのだろうか
- 障害を知られたくなく、隠している人もたくさんいる。そこは踏み込みにくく難しい

地域
の声

実際の話

参加したら「なんで来たが」と言われたり、「みんなも大変な時だから特別なことはできん」と言われたり「危ないから寄っついて」と言われたり。親の会などでこのようなことを聞くことがあります。障害があることを知られたくないだけではないのですよね。そういう体験を聞くことで、「やっぱりそうなんだ」、「そんな扱いされるのだ」とあきらめてしまうことがあります。

避難訓練に参加しないというのは、当事者よりも親の方が周りを気にしていることが多いようです。

情報を伝えて安心して参加できる工夫が必要

例えば、聴覚障害の人は外見上から障害があるかどうかわからないので、聴覚に障害があるということを知ってくれているだけで安心できる。と言われます。当事者の方にこのように研究しているということ、県や市町村でマニュアルを作成するようにしていること、地域ではこんなことしているといった情報提供もメッセージになり、安心して参加しやすくなると思います。

当事者・家族
の声

参加していく中で腑に落ちていく

このような、研究や調査をしていく中で自閉症協会平野会長も話していますが、「自分も実は参加していないが、やはり参加しないといけない。そこからが始まりよね」と、腑に落ちるようになってきていると言われています。参加しないと情報が入ってこないし、人は情報を入れようとしないうけで、だから情報を常に伝えていく。そうすると「あ、何か自分たちに働きかけをしてくれている。伝えようとしてくれている」ということが相手に伝わると思います。

報告書には意識の

違いを集計しています。例えば知的障害と発達障害と一緒にされている所があります。明らかに本人たちの意識というものは違います。かといって自主防災の人たちに頑張ってねとは言えません。障害の特性に分けて、共通の部分等、ガイドブックを作成しています。市町村作成の「一般避難所の運営マニュアル」に付随した「(要配慮者特性に応じた支援マニュアル)」です。全部わからなくてもいいのです。表現の仕方を優しい言い方に変え実際に生活の面でどのような困りごとが起こるのか、それにどのように対応したらいいのか、等載っています。

メッセージ



※ニーズ調査の報告書は障害者福祉センターでも貸し出しています。 会長 武田 廣一 さん

高知県災害弱者支援センター準備室 杉野修さんにインタビュー

レネー福祉サービスを運営するNPO法人まあるい心ちゃれんじどの応援団が「高知県災害弱者支援センター準備室」を立ち上げました。



高知県災害弱者支援センター準備室

立ち上げた理由

▶災害時における避難行動要支援者名簿作成対象外になるグレーゾーンの人・災害弱者とは

高知市は避難行動要支援者の対象者は名簿を作成することになっています。名簿に掲載されていない「支援が必要な人」として把握されない人たちはどうなりますか？ ここはA型就労支援事業所です。ある程度自立した人が多いのですが、災害時に適切な判断が難しく何らかの支援が必要にもかかわらず名簿の対象者ではありません。いわゆるグレーゾーンになるのです。

地域で避難訓練をしたところ名簿に載っている方が自力で避難所に来ることができたという話も聞きますし、名簿に載っているから自力で避難所に来ることができないというわけではないので、名簿に載らないグレーゾーンにいる人たちを掘り起こさないといけない、「災害弱者とは何か？」ということを改めて考えました。

▶グレーゾーンの人たちをどう救うか

災害について「学ぶ場」は命を守るために必要です。例えば地域でされていることを「分かりやすいマニュアル」にしてあげると誰もが理解し参加しやすくなります。

この作業所の利用者も、知的障害がある人は自分で判断することは難しいですが、わかりやすく指示をすれば、訓練してお菓子を作ることもできます。

つまり作業手順をマニュアル化もしくはシステム化することで、できるようになるのです。それは防災も同じことだと考えています。

▶イメージする学習「目黒巻き」を活用してみた

「目黒巻き」とは地震発生前と発生後を時系列にして行動をイメージすることができます。

例えば、通勤時間の○時○分に災害にあった場合を想定し、避難する場所があるか、時間帯や場所を変え、ここなら避難できるね、など本人と一緒に確認します。家ではタンスやテレビなどが倒れてこないか、寝ている時に地震が起ころうと、怪我をしないようにどうしたらいいか、そういうことを本人と学習します。

取り組んでいること

▶今、できることとは

一言でいうと「当事者による当事者のための組織づくり」です。災害時、障害のある人が中心になって活動する、当事者のための災害ボランティアセンターを地域に立ち上げることができたらと考えています。

障害を持つ当事者が中心になり運営している組織に、被災障害者支援を目的とした「NPO法人ゆめ風基金」があります。障害のある人がリーダーとなり、災害時にボランティアセンターを立ち上げ、当事者のために様々なフォローができるよう全国で活動しています。しかし、高知では、みんな切羽詰まっても一歩を踏みださないのが現実です。

災害弱者ボランティアセンターを障害のある人たちが本気で考えて立ち上げたら与えるインパクトは大きいと思います。

▶避難訓練で感じること

地域で避難訓練をする際、健常の人が障害者役として訓練をしたりしているが、当事者を堂々と連れてきたいと思っています。怪我でもして何かあったらいけないので、障がい当事者が訓練に参加したいと手を挙

げて、怪我をさせたら責任持てないことを理由に断られたという話もあります。

障害のある人、その家族もこのような積み重ねがあるために、なかなか避難所に行くことは、難しいですよ。特に顕著なのは精神障害のある家族の場合「近所の人に情報を知られたくない」と思っている人は多くいます。このような状況を理解したうえで、考えないと難しいですね。

▶こんな避難所なら安心できる!!

「あなたは何かあったら避難訓練に参加する？」または「避難所に行こうと思いますか？」と聞くと、ある当事者は「例えば『災害弱者センター』と書いてある大きなテントを立ててくれれば、自分たちも避難所に行っても良い居場所がある、ということが分かるのでそれなら避難所に行こうかなと思える」と言っていました。

保護者からは、「自分にとって居心地がいいところは、信頼できるコミュニティーなので、『地域』だけでなく、『仲間』というコミュニティーがあるといいなと思います。自分の知り合いに『一緒に行こう』と声をかけてもらえると訓練にも行くのでは」というご意見をいただきました。

これからの防災とは

▶情報のキャッチ

(携帯電話、パソコンなど新しいITの活用)

分散型になればなるほど情報をキャッチすること、「自分たちはここにいますよ」と言ったSOSも発信していかないといけないと思います。待っているだけではなく、やはり声を出さないといけない。

災害時は給水や配給がどこであるのかといった情報を必ずキャッチできる仕組みは必要だと思えます。

例えば、高知県立大学の神原咲子教授を中心に平成30年7月豪雨の被災地で被災者支援情報ポータルサイト「まちなび」を立ち上げ、翌年は台風の被災地でも「まちケア」として活用されました。高知でも活用できるように現在準備が進んでいます。情報は地域の人

が入力し、ネットで給水場所や配給場所、ガソリンスタンドはここが開いているなどをネットで検索し情報をキャッチできる仕組みです。

▶キャッチした情報を使えるようにする

様々な防災に関するアプリは開発されていますが、これを普及するためには日常的に使えて、緊急になった時にそれが情報の発信としての役割を果たすものになる仕組みでないと、普及しないと思います。

障害者だけではなく高齢の人たちにも使えるように学習する必要があります。

「あそこに〇〇がある」「これを言っておかないといけない」など良い意味でお節介ができるのは高齢の人だと思えます。

障害者は高齢者の先駆者

高齢になって出てくる課題のほとんどは障害者の課題なのです。

知的であれば認知の問題、身体であれば車いすなど、視力障害、聴覚障害、実は高齢になって出てくるであろう課題というのは、全て障害者の課題でもあります。障害のある人たちの様々な課題を解決していけば、高齢になったときに必ず助けになる技術というのは出てきます。障害者を特別視するのではなく、彼らの課題を解決するという事は、地域や高齢社会の課題の解決に直結すると思っています。

メッセージ



村田一平さんにインタビュー

自立生活センターアライズの代表をしています。当事者3名、スタッフ10名程です。地域の中で自立して生活していける当事者さんをもっと増やしていきたいですね。

障害のある当事者による活動

災害時に向けて、準備していること

▶24時間、呼吸器の電力確保が必要

私の場合、呼吸器の電力供給のため、避難所は難しいと思っています。車の燃料は常に満タンにしています。今はコロナの感染症も心配ですので、災害時は車中泊をするつもりです。

▶自分達のことを知ってもらおう活動

私のように介護や呼吸器(電気)が必要な人は、周りの人に自分を知ってもらわないと助けてもらうことは難しいでしょう。なので今いろんな人に、自分や同じような障害のある方のことを知ってもらおう活動をしています。

避難訓練について感じる事

地域の避難訓練に参加したことはありませんが、高知県立大学での避難訓練に参加したことがあります。それまで県立大では「当事者にどう対応したらいいのかわからない」という理由で障害のない方が『障害者役』をやっていたそうです。同じ理由で、実際に地域の避難訓練に「参加させてください。」とお願いしても断られるケースが多いです。訓練当日は多くの当事者が集まり、いろんな方に見ていただくことができ当事者が参加することの大切さを感じました。

▶自分達のことを知ってほしいから発信し続けます

防災の活動や取り組みの中で、女性防災組織の方、大学で防災に取り組んでいる方、地域の自主防災組織など、色々な方と関わってきました。今後はさらに、一緒にイベントや防災キャンプなどしたいと思っています。

実際に助けてくれるのは地域の方なので、これからも僕たちは、地域に災害弱者がいることを知ってもらおう普及活動を積極的に新規開拓していきたいと考えています。

「防災」と「目黒巻き」について

目黒巻きとは

時系列に災害時の自分の行動パターンをシミュレーションしていきます。行動の仕方、連絡の取り方が生き抜くヒントに繋がっていきます。

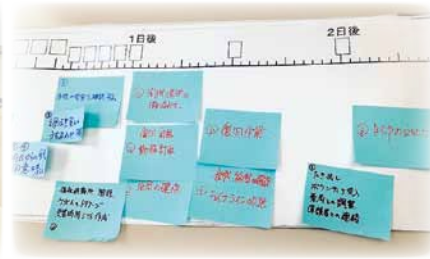
地震、水害、土砂崩れ、色々な災害のパターンがあります。

「防災」というキーワードだけでは漠然としていて、具体的に何を備えたらいいのかわからない。自分の生活や行動範囲の中から、災害と備えの仕方を整理して考えていく。親御さんや施設の支援者と一緒に避難訓練をし、作っていくといいですね。

イメージすることが大事

▶目黒巻きを作る時のコツ

- ①自分が住んでいる所ではどんな災害が起きやすいか。
- ②災害によってどんなことが起こるか。
- ③どう対処すればいいのか。…など、ポイントごとに整理して作っていきます。最初は、一人で作るのは難しいと思いますので色々助言してあげるとイメージしやすいと思います。



※目黒巻きの作成、取り組みは障害者福祉センターの部屋を借りて行っています。ご興味ある方は、見に来てください。

考え方の例

▶筋ジストロフィーの知人の場合 ～水害編～

「1階が水没したら呼吸器がまずだめになるから2階上がらないといけね。」
「でも2階に上がれないかもしれない。親も結構歳だし。」
「じゃあどんな対策が必要になると思う？」

一言 僕も目黒巻きを何回もしていますが、正解はありません。出かける時に考えるのです。この辺りは災害起きやすいね、ここで起こったらどうしようかと、日頃考えています。

考え方の例

▶支援者の場合

「私たちはどう動いたら良いのだろうか。施設に戻ったほうが良いだろうか。利用者さんのお家を見に行くべきだろうか。どう助けたら良いのだろうか。」

一言 障害のない方でも災害時にどうするか、考えておかないといけねいですよね。正解はなくて、自分達で考えるしかないんですよね。

障害があるからこそ伝えたいこと

障害のある方へのメッセージ

自分の生活を作ることと、防災は「自分の身は自分で守る」という意味から同じだなと思っています。自分のことを考えて発信することで、周りに知ってもらえる。地域の人から気にかけてもらえる人が一人でも増えれば、助かる確率が高くなると思います。

自立した生活を考える

病院や施設、親元で生活していると、「自分はこうだ」と意見を言う機会が無くなっていく方もいます。僕も昔はそうでしたから。もし今その状況に置かれている方がいたら、一人で「頑張れ」とは言いません。アライズに繋がってくれば、「一緒に頑張っていく」と言えます。地域の中で自立して生活していく仲

メッセージ

間をもっと増やしていきたいですね。

親は先に年老いて亡くなります。いずれは地域に出て自分で暮らしていけるようになったほうがいいですね。

地域の方、支援する方へのメッセージ

地域の方には、周りに自分たちのような障害を持った人がいることを知ってもらいたいというのが一番の思いです。それには自分たちも発信していかないといいけません。

僕のところには、平成福祉専門学校の方もアルバイトにきており、僕を知っている方は増えてきています。支援する方もどこまで支援するかが、難しいと思いますので見て知ってほしいです。うちではアルバイトさんのお仕事見学もやっています。

誰一人とり残したくない！地域の思い

初月地区

初月地区防災連合会長 松下潤一さんにインタビュー

要支援者名簿の情報提供に同意された方に対して個別計画を100%達成。個別計画の実効性を検証するために障害のある方も含めて実際に避難訓練を行っている。



Q1 情報開示の同意を得られた人全員の個別計画作成のポイントなど教えてください

▶縦割りをなくした

地域の縦割りをなくし4団体（防災連合会、町内会連合会、民生委員・児童委員協議会、地区社会福祉協議会）との協働が成功のカギとなっていますね。

▶「支え合いマップづくり」から見えてくる

例えば、支え合いマップは民生委員さんが作成するものという概念が定着していますが、町内会でも広げようと、地域の4団体と協力し、「支え合いマップづくりの学習会」や、町内会長も1件1件訪問してマッピングを行い、このマッピングを基に個別計画を作成しました。

支え合いマップづくりでは、同意を得られた人の個別計画を作成するだけでなく、同意していない人への対応もできますので、結果的に地域全体での認識を高めていくことに繋がりました。

▶支援できる人が少ない

支援者が不足しています。2019年時点での名簿情報開示の同意者770名の内、614名が75歳以上のほぼ元気な高齢者です。避難の際、誰かの助けが必要な人に支援が行き届くよう、要支援者ではありますが、支援者になってもらえるのではないかと考えています。

Q2 避難訓練について教えてください

▶障害のある人も一緒に避難訓練

要支援者と支援者を対象に、小学校2年生の肢体障害の女の子や自閉症の方も一緒に避難訓練をしました。（2019年初月地区の9つの町で実施）

▶接し方が分からないという課題

支援する人が「どのように対応したらいいのか、わからない」という声がやはり多いです。

市でプラットフォームを整え対策を考えてくれると、障害のある人もみんなが安心できると思います。



初月地区防災連合会 避難訓練の様子

これからの避難所について

昨今の新型コロナウイルス等の感染症への対策も考慮した場合、収容人数が減り、避難者全員の収容が難しくなり、要支援者にとっては、関連死も懸念されるため、一番は在宅避難が有効だと考えています。

やはり「自助」が大事

避難所の分散を考えると「避難所へ行く」という概念から「避難を支援する拠点」へと考えることも必要かと思えます。そのためには、普段から自宅に備蓄品をそろえておくこと、家具転倒防止策をとっておくことなど、「自助」でできることをするのは大事だと思います。

メッセージ

北高見町

北高見町内会長 濱渦修一さんにインタビュー

6年前に「こうちノーマライゼーションVol37」特集“南海地震に備える”でインタビューした北高見町のその後。



Q1 要支援者名簿にない方で支援が必要と思われる人の名前が挙がることはありますか？

北高見町は町内会と自主防災組織が同じなので、月に1回の定例会で防災の話ができるという利点があります。そういう方がいるという話は聞きますが、多くは町内会員になっていないのが現状です。

▶会員になっていない人にも知らせる！

町内会員になっていないと顔が見えず、地域の情報も届きにくくなります。しかし、町内の住民ですから町内の動きはとにかく知らせる！逆に「知らない」と言われたいと思うくらいの気持ちですね（笑）

北高見町は回覧板を廃止にしました。途中で止まったり、回覧のお知らせが何枚もあると読んでいないこともあるので、回覧の内容を町内会便りに落とし込み全戸に配っています。

Q2 障害に限定することではないと思いますが、支援が必要な人に対してどのような取り組みをされていますか？

▶いざという時は知らせてほしい

避難時に支援が必要な人はどのように知らせたらいいのか、町内会でも意見が出たので、名簿に掲載されている要支援者全員に緊急用の笛と防寒・保温アルミシートを配布しました。

日頃からつながりを大切に情報収集と連携はしていますが、100%把握することは個人情報のこともあり難しいです。だからこそ、いざという時は支援が必要な人も「助けて！」と人に知らせる行動も大切だと思います。

▶できることをひとつずつ

町内会でも自分たちができることは何か話し合い、緊急時の備えとして救急医療情報キットを配布したり、できることをやってきました。車いすで避難できるルートと場所の整備もしました。例えば、避難所は4人で抱えないと上がれない場所、2人で上がれる場所、電動車いすなら上がれる場所を確認し、さらに車いすを抱えて上にあげる訓練もしています。

Q3 障害のある方が避難訓練に参加されたことはありますか？

▶参加してもらえよう声かけをしています…

避難訓練は年1回やっています。障害のある方というか、歩行が困難な方とか声かけはしていますが、なかなか出てきてはくれないですね。避難訓練には車いすの人もいます。ただ、知的障がいや精神障害のある方の情報がないので、こちらから踏み込んでいくこ



避難ルート

とは難しいです。「町内会便り」を全戸に配ることは、町内会で把握しきれていない支援が必要な人にも情報が伝わるものだと思っています。

Q4 SNSを活用した広報手段は考えていますか？

▶紙媒体の良さ

以前はHPを考えましたが、管理できる人がいないのであきらめました。HPを見る人と見ない人、携帯もスマートフォン



町内会便り

の人は増えましたが、全員ではないです。情報を得るために自分からアクセスしていかなくてはならないけど、毎月このように「町内会便り」が届く紙媒体の方がやはり確実かな。

正直、毎月、大変ですよ。（笑）町内会には若い方も出てきてくれますが、引き受けてくれる人がいないので、何か良い案がないか模索しています。

下知地区

下知地区減災連絡会事務局長 坂本茂雄さんにインタビュー

障害者施設「すずめ共同作業所」の家族会との
防災活動の取り組み
「SOSカード」「防災カード」の紹介



Q1 地域にある障害者施設「すずめ共同作業所」と共同で実施している防災について教えてください。

▶一緒に訓練するようになったきっかけ

下知地区にある減災連絡会の資料印刷を「すずめ共同作業所」へ依頼していたので、作業所の職員と「地区防災計画」の話をしたことがきっかけです。地区防災計画の中に「福祉の視点を持ち込んでもらいたい」と言う職員の思いがあることを知り、計画作成にあたりメンバーとして参加してもらいました。

施設を利用されている家族会からも「地域の人と防災のことをやりたい」と声が上がリ、防災について一緒に取り組んでいくことになりました。

▶施設の訓練を見学して分かったことは

まずは、「すずめ共同作業所」の訓練を見せてもらいました。

軽度の障害のある利用者が重度の障害のある利用者を支援する状態で、「これは大変だな、誰かの支援がなければとてもではない」職員だけでは手が回らないということを目の当たりにし、地域も連携できたらと考えるようになりました。

▶家族会の思い、地域の人々の思い

家族会と一緒に議論していくなかで、気持ちの変化が見えてきました。はじめは「自分たちのことを地域に明らかにしていくこと」「自分たちの困りごとを地域に言うことはどうなのか」「迷惑になるのではないか」との意見がありました。しかし勉強会を重ねるうちに「やはりそこは知ってもらわないと支援を受けることができないよね」「障害の理解」から知ってもらいたいという前向きな思いに変わっていきました。実は、避難行動要支援者対策が始まり個別の支援計画の作成が始まったころから「障害の理解」は大切だと考えていましたので、支援する側もされる側も同じ思いだということが分かりました。

その後、すずめ共同作業所

の施設長、市の職員、減災連合会のメンバーでワークショップをして、話し合っていくようになりました。



‘障害の理解’が大切だと痛感したできごと

要支援者の方も参加している訓練をした時の話ですが、運営側は要支援者がどなたなのか分かりません。私が大きな声で呼びかけたら、ある子供さんがものすごく怖がったのです。あとから聞くと、実は発達障がいがあり、大きな声に過敏に反応してしまったそうです。知っていたら対応の仕方があるのですが、「知らないでパニックにさせてしまうことがあるのだ」と痛感しました。

▶災害時に役立つオリジナリティなカードの紹介 《すずめ共同作業所のSOSカード》

支援を受けやすくすること 支援者を増やすこと

障害の特性やニックネームなど書いたカード（A4）を一人一人作り、ビブスの後ろに挟んでいます。ビブスは作業中も着用しています。

例えば、「ゆきさん 一緒に逃げましょう」と声をかけ

ることで、その人の行動を促そうとするものです。人によって声をかけるキーワードが違うので、周りの人も声をかけやすくなります。この「SOSカード」は個別計画にもなるかと思っています。



「すずめ共同作業所」の「SOSカード」
命を守るためのカード



ビブスをつけて避難訓練



Q2 障がいのある方と一緒に取り組んでいくには？

施設にいる間は施設で命を守ってもらえる。家に帰ればその地域の人に守ってもらうことになります。もう一步踏み込めないかなと思うことはありますね。

ケアマネなどの支援者による聞き取りで個別計画を作成していく動きも出てきています。地域の防災会にも聞いてくれたら積極的に一緒に対応策も考えていけます。私たちも専門知識を聞きながら考えていかないと、自分たちだけではできないと思います。本人はもちろん支援者や施設も含めた繋がりが重要です。

▶避難訓練で感じること

下知地区は津波警戒地域ですので、レベルの高い「条件付与型訓練」をしてきました。これは市の職員指導の下、その場で条件が付けられ適宜対応していく訓練です。

お互いにつながるために、ハードルを下げた訓練も行っています。起震車で揺れの体験をしたりイベントを開催したりしました。イベントには、「すずめ共同作業所」にもブースを出してもらいました。

《下知地区防災カード》

避難所での受付をスムーズにするために考えられたカードで、このカードを身につけている場合は何らかの支援が必要な方であることが一目で分かるようにしました。

他の施設や地域などでも、オリジナルの「SOSカード」や「防災カード」を作ることでもできると思います。



「下知地区防災カード」

これからの方向性

下知地区は津波浸水地区で20分～

30分で津波がきますので、家の中まで入って助ける時間がないかもしれない。まずは外に出てきて欲しいです。「出てくるにも出てこれない人もいるのではないかと」といった声もあります。

「自助」としては家具転倒防止や耐震化等があります。阪神淡路大震災の時のようにみんなで家具を持ち上げたりしていたら津波に飲み込まれてしまうリスクは減らせます。

「共助」として、下知地区では防災講演会や訓練のときに市の職員も来ていますので、補助制度の申請手続きをその会場でできるような体制をとりました。個人で手続きするよりは、その場で手続きができればいいですよ。つまり「自助」だけではできないけど「共助」が後押しすることで「自助」の完成形に繋がります。

障害のある方が参加しやすい工夫

スロープがない避難所が下知地区にもあります。スロープを設置するには費用面やスペースの問題もあり簡単ではないため、その代わりとなるエアマット式担架を避難所に準備しました。

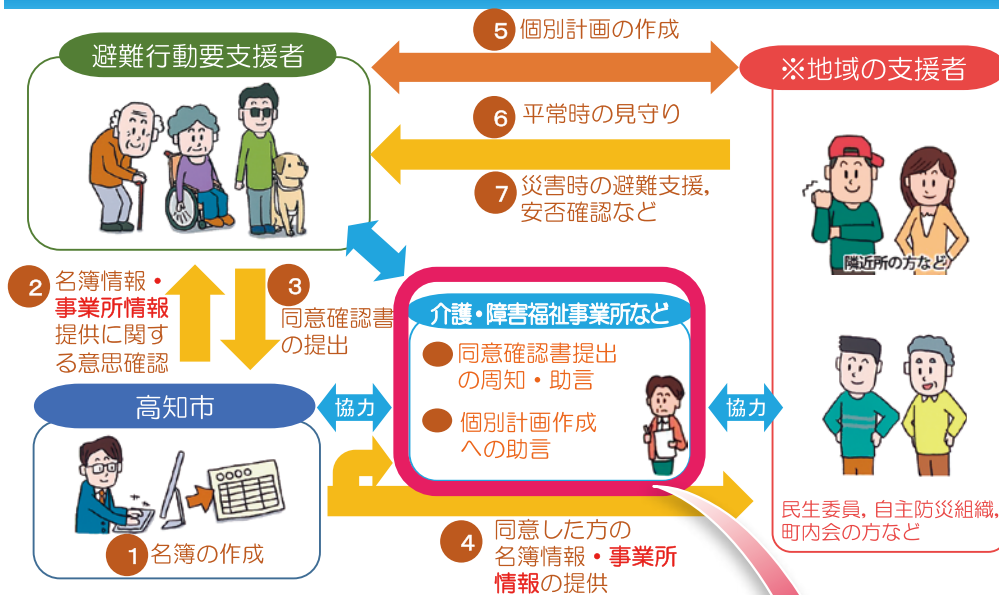
スロープのない避難場所でも避難をあきらめないでほしい。しかし重度の障害で電動車いすの場合はエアマット式担架では難しいので、そこは課題だと思います。身近にニーズがあるのでそれに応えられる開発が進んでくれたらいいですね。

高知市の避難行動要支援者対策

災害時に避難支援を要する方を「避難行動要支援者」と定義

東日本大震災では、多くの高齢者や障害者、避難支援に当たった地域の支援者が犠牲となりました。このことを踏まえ、高知市でも名簿を作成し、災害時に避難支援を要する方の命を守るための体制づくりを進めています。

高知市における新たな仕組み



名簿は、対象者の同意を得た上で地域の支援者に提供することにより、日頃からの見守りや災害時の避難支援のための個別計画作成、また、訓練実施により災害時の声かけや避難支援のために作成しています。

地域の支援者(名簿提供先)

- ・地区民生委員児童委員協議会
- ・高知市社会福祉協議会
- ・地区社会福祉協議会
- ・自主防災組織
- ・町内会
(自治会・自治公民館等を含む)
- ・高知市消防局, 高知市消防団, 高知県警察
- ・その他市長が認めた団体

名簿の対象者は、生活の基盤が自宅にある以下のア〜クの方です

- ア 75歳以上でひとり暮らしの方
- イ 75歳以上の方のみで構成される世帯の方
- ウ 要介護認定3〜5を受けている方
- エ 身体障害者手帳1・2級(総合等級)を所持する方
- オ 療育手帳Aを所持する方
- カ 精神障害者保健福祉手帳1級を所持する方
- キ 日常生活において部分介助及び全面介助を要する在宅難病患者
- ク 上記以外で特に支援の必要がある方

避難行動要支援者対策の推進には、地域の支援者に加え、介護サービス等により、日頃から避難行動要支援者の様子がわかる介護・障害福祉事業所を含む関係者との連携が必要と考え、令和2年度は、新たな仕組みでモデル地区を設定し個別計画作成に向けた取り組みを行いました。



種崎地区
防災&支え合いマップ作成の様子

名簿対象者の質問

Q 名簿が悪用されることはないですか?
A 名簿情報は避難支援の目的のみに利用します。個人情報の漏えいや紛失等がないよう、提供先と協定を締結するなどして、適正な管理をします。

Q 個別計画作れば必ず助けてもらえるのでしょうか?
A 避難支援者も被災することもあるので必ず支援を受けられるとは限りません。自分の身は自分で守る意識を持って、日頃からコミュニケーションをとることなど心がけてください。

Q 名簿にはないが載せた方がいいと思われる方がいる場合はどうすればいいですか?
A 市へ連絡をお願いします。市から本人へ名簿に関する情報など説明し意思確認を行います。

支援する人の質問

Q 避難支援者にはどのような義務や責任が発生しますか?
A 避難支援者は、善意と地域の支え合いで行っているものであり、災害時に避難支援ができない場合責任が伴うものではありません。ご自身やご家族の安全を確保したうえでできる範囲で避難支援をお願いします。

お問合せ先 高知市 防災対策部 地域防災推進課 ☎088-823-9040

令和3年度障害者福祉センター

年間行事カレンダー(2021年4月～2022年3月)

高知市社会福祉協議会 障害者福祉センター
 住所：高知市旭町2丁目21-6
 電話：088-873-7717 FAX：088-873-6420
 E-mail：asahi@kochi-csw.or.jp

開催予定日・期間	行事名称	対象	備考(募集期間・開催場所等)
(通年) 2021年4月～2022年3月	出張手話講座	高知市在住または 在学、在勤で10名以上の グループや団体	募集締切：派遣希望日の30日前までに 開催場所：申込みをされたグループ、団体で ご準備をお願いします
2021年5月29日(土)午前 10:00～12:00	自動車運転支援者講座	作業療法士等、自動車運転 に係る支援者の方	募集期間：4月12日(月)～5月12日(水) 開催場所：高知県運転免許センター
2021年5月29日(土)午後 13:00～16:00	障害のある方の運転教室	18歳以上で高知市在住の 肢体に障害のある方	募集期間：4月12日(月)～5月12日(水) 開催場所：高知県運転免許センター
2021年6月19日(土) 10:00～12:00	パソコンのエクセルで 絵を描こう!体験教室	小学生以上で高知市在住の 障害のある方 (マウス操作が可能な方)	募集期間：6月1日(火)～16日(水) 開催場所：高知市障害者福祉センター
2021年7月17日(土) 13:30～15:30	はじめての頭脳スポーツ (将棋)体験教室	小学生以上で高知市在住の 障害のある方	募集期間：6月1日(火)～7月9日(金) 開催場所：高知市障害者福祉センター
2021年 8月4日(水)～8月27日(金) 水・金曜日(祝日を除く) 全8回18:30～20:30	はじめての手話講座 (夜コース)	小学生以上で高知市在住 または在学、在勤の方	募集期間：7月2日(金)～21日(水) 開催場所：高知市障害者福祉センター
2021年8月28日(土) 13:00～16:00	作る!楽しむ! プラモデル教室	小学生以上で高知市在住の 障害のある方	募集期間： 〈障害のある方〉7月12日(月)～8月23日(月) ※〈一般〉8月10日(火)～8月23日(月) ※定員に空きがある場合のみ 開催場所：高知市障害者福祉センター
2021年10月23日(土)午前 10:00～12:00	自動車運転支援者講座	作業療法士等、自動車運転 に係る支援者の方	募集期間：9月15日(水)～10月8日(金) 開催場所：高知県運転免許センター
2021年10月23日(土)午後 13:00～16:00	障害のある方の運転教室	18歳以上で高知市在住の 肢体に障害のある方	募集期間：9月15日(水)～10月8日(金) 開催場所：高知県運転免許センター
2021年11月20日(土) 10:00～15:00	第5回障害者福祉センター 文化祭	どなたでも参加可	実施予定行事・作品展、屋台コーナー ・陶芸素焼き皿絵付け体験 ・プラモデル作り体験
2021年12月18日(土) 10:00～14:00	障害のある方の クリスマス料理教室	高知市在住で障害のある方	募集期間：11月5日(金)～12月3日(金) 開催場所：高知市障害者福祉センター
2022年1月22日(土) 13:00～16:00	障害のある方の「防災講座」	小学生以上で高知市在住 または在学、在勤の方	募集期間：12月6日(月)～1月14日(金) 開催場所：高知市障害者福祉センター
2022年2月3日(木)～28日(月) 各月・木曜日(祝日を除く) 全8回 13:30～15:30	はじめての手話講座 (昼コース)	小学生以上で高知市在住 または在学、在勤の方	募集期間：1月6日(木)～24日(月) 開催場所：高知市障害者福祉センター
2022年3月5日(土) 10:00～12:00	障害のある方を支援する ボランティア体験	高知市在住で障害のある方 の支援活動に興味・関心 のある方	募集期間：2月1日(火)～18日(金) 開催場所：高知市障害者福祉センター

※開催予定は変更になる場合があります。

ほっこりエピソード



私は四肢障害。ある日バスに乗車。すると空いている席が一番後ろだけ。「移動がしんどい」と思っていたところ、入り口付近に座っていた学生がスマホを触りながら、後ろの席に移動してくれた。その温かい心遣いにほっこりしました。

一編一集一後一記

■「天災は忘れた頃にやって来る」よく聞く言葉ですが、どのように来るかのイメージが、映像でしか浮かばないのは、私だけでしょうか。経験することで見えてくるものが、沢山あります。誰かが言っていました。「何事も、やってみなくちゃ分からない!」(七) ■ 誰一人取り残さないために何が必要なのか、支援が必要な方と支援する方の想いに触れる機会になりました。(昌) ■ 今号を手に取り、一人でも多くの方に、防災を考えるきっかけになってほしいとの思いを込めて作成しました。障害のある方も、障害のない方も一緒に取り組んでいただけなら嬉しいです。(松) ■ 今、非常事態に陥るかわからないけれど、万全な準備を備えておかなければと思いつながら、なかなかできていない(川)である。(川) ■ 先日の避難訓練 体固まる いざという時どうなることか。(吉)



ほんとうに
あった

障害者あるある4コマまんが

絵：高知大学教育学部附属特別支援学校
中学3年生の皆さん

絵：石建 未琴さん（高知県立盲学校）



こづちノーマライゼーション

発行 高知市社会福祉協議会 障害者福祉センター
〒780-0935 高知市旭町2丁目21番地6
TEL: 088-1873-1771
FAX: 088-1873-6420

URL: <http://www.kochi-csw.or.jp/>
E-mail: asahi@kochi-csw.or.jp

同封しておりますアンケートにご協力ください。

お答えいただいた方の中から抽選で10名様に、高知市社会福祉協議会キャラクター「ほおつよけん」のオリジナルハンカチをお送りします。
※当選は発送をもってかえさせていただきます。



こうちノーマライゼーション 読者アンケート

この度は、「こうちノーマライゼーションvol.46」をご覧いただき、ありがとうございます。

今後のよりよい紙面づくりのために、アンケートにご協力をお願いいたします。以下の質問にお答えいただき、FAXまたは郵送にて当センターまでご送付ください。抽選で**10名様**に障害者福祉センターオリジナルほおちょけんハンカチをお送りいたします。なお、当選は賞品の発送をもって代えさせていただきます。

受付期間：令和3年12月末

(1) 住所・氏名・連絡先を教えてください。（賞品をご希望でない方は未記入でも結構です）

住 所	〒
氏 名	
連絡先	☎ () -

(2) 年齢を教えてください。

- 10歳代以下 20～30歳代 40～50歳代 60歳代以上

(3) 本誌をどのようにして知りましたか。

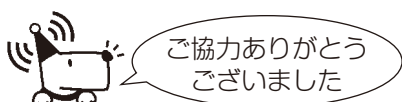
- 学校・職場 市役所等の窓口 病院・施設の窓口や待合所
 その他

(4) 本号で興味深かった記事を教えてください。（複数回答可）

- 高知県・障害のある人の防災ニーズ調査 高知県災害弱者支援センター準備室
 障害のある当事者による活動 誰一人とり残したくない！地域の思い
 高知市の避難行動要支援者対策 ほっこりエピソード
 ほんとうにあった障害者あるある4コマまんが

(5) 本誌へのご意見・ご感想、今後希望される特集・テーマ等がありましたら、教えてください。

※本アンケートでご記入いただいた内容は、障害者福祉センターの事業に関わる目的のみに使用し、他の目的には使用いたしません。



◆ 送付先 ◆

高知市社会福祉協議会 障害者福祉センター
〒780-0935 高知市旭町2丁目21-6
ファックス：088-873-6420

高知市社会福祉協議会 障害者福祉センター

こうちノーマライゼーション

KochiNormalization

VOL. 46

2021. 3

特集「障害のある人の防災」 みんな考えている 障害のある人の思い支援する人の思い

高知県・障害のある人の防災ニーズ調査 1～2

高知県災害弱者支援センター準備室 3～4

障害のある当事者による活動 4～5

誰一人とり残したくない！地域の思い 5～8

高知市の避難行動要支援者対策 9

障害者福祉センター年間行事カレンダー&ほっこりエピソード 10

ほんとうにあった障害者あるある 4 コマまんが 11

高知県障害者（児）福祉連合会長 武田廣一さんにインタビュー

高知県障害者（児）福祉連合会とは、障害団体の違いを超え高知県の障害福祉が充実することを目的として政策提言や職場環境調査や研修を行っています。高知県知的障害者福祉協会、高知県知的障害者施設家族会連合会、日本ダウン症協会・高知小鳩会支部、高知県自閉症協会、高知県精神障害者家族会連合会、社会福祉法人明成会が集まり、「高知県・障害のある人の防災ニーズ調査」を実施し、報告書をまとめ、県へ「障害のある人の防災避難についての提言」として報告を行いました。

高知県・障害のある人の防災ニーズ調査

「高知県・障害のある人の防災ニーズ調査」をしたきっかけ

▶当事者の意見を聞こう！

災害対策に関して、障害のある方が取り残されているのではないか、その原因は、どこにあるかを知りたくて調査を行いました。防災マニュアルに当事者の意見が反映されているのだろうか。例えば要配慮者の名簿にしても、名簿作成の情報が伝わっていない。本人たちも名簿が作成され掲載されていることすら知らなかったり、あきらめている人が多いのが現状です。当事者の意見をまず聞こう！そこからではないか！そこから始まらなければならない。ということで「障害のある人の防災避難ニーズ調査」のためアンケートや意見交換会を行いました。

伝わるためにはどうしたらいいか

ポイント1 情報の伝え方の工夫が必要

障害によっては、情報を伝えること、こちらが情報を得ること自体の困難さがあります。『障害のある人たちに情報が伝わっていない』➡『伝わるような伝え方をしていない』から・・・情報を郵送しているだけでは伝わらないのです。調査の中でも、自分は読めないのを代読してくれる方に読んでもらうという方もいました。聴覚障害の方には、通訳者を通して目で見て分かるもので伝えるなどの工夫が必要です。「自助」の大切さを言われますが、情報が伝わり、さらに一緒に体験をしないとわからないことだと思います。具体的にどのような伝え方をすれば本当に伝わるのか考える必要があります。

ポイント2 「やさしい日本語」

災害に関する言葉は難しいですね。今は外国人の方もたくさんいます。漢字を見て理解できることもあります。視覚障害の方にも小学生にも分かりやすい「やさしい日本語」で伝えることが大事。例えば「避難用具」、わかりませんよね。

令和2年2月1日に「障害のある人も参加できる地域防災避難訓練」シンポジウムを開催高知市に協力いただき、シンポジウムの参加者80名の内、約20名が自主防災会の方でした。全体の7割の方がアンケートに回答してくれました。アンケートの詳細な内容については、調査報告書に載っています。

▶訓練に参加することが先

要支援者には個別計画を作成して避難方法や、避難訓練に参加するといった流れになっているように思いますが、まずはここが一番大事で避難訓練に参加するということ。参加し易くするためには、普段からのつながりが大事になります。しかし普段からのつながりというのは簡単に作れるものではないのです。訓練に参加してもらう、参加し易い状況を作るためには、両者のハードルを下げていくような方法が必要だと思ふことが結論というか、我々の一つのステップとして具体的な目標になっています。地域の避難訓練に、まず参加することで「こういう人がおるね」とわかり、そこからつながりが見えてくる。ということを狙っています。

シンポジウム参加者の声を少しご紹介します

当事者家族の声

「防災に関して地域で相談してもなかなか相談に乗ってくれない。わが子を一番先に助けて欲しいとは思っていません。地域に介助が必要な子がいるということを知ってほしい」

当事者本人の声

「コミュニケーションが難しいのでどうしたらいいですか？」その場合「SOS」カードを持って、避難所で支援を得られるようにしてはどうでしょうか。と提案しました。

地域防災に係わっている人の声

民生委員の負担が心配。何か全体の対策というものが大切ではないかと思います。障害のある方がどのように考えているのか、伝え方の工夫が少しわかってきた。これから取り組んでいきたい。

「障害のある人の防災避難ニーズ調査」から見えてきたこと

▶地域だけではなく様々なところからの情報発信も必要

今回の調査では通所の事業所にも協力いただきました。福祉事業所は長くて半日の方や週〇回という方もいらっしゃる。事業所も利用者に対して地域の個別計画ができているかどうか、現状もお聞きして、なおかつ地域の自主防災会の訓練のことを知っているかどうか、参加しているのかなど、地域の情報を一緒に調べることで地域に繋げていく方法も求められると思います。今後は、どこかだけではなく、いろいろなところからどのように情報を発信していくかが大事です。それがきっかけとなり地域に顔を出せる、ある時は一緒に参加できるようになると信じています。

家族構成や居住環境であきらめている人が多い

被災の恐れがあるところに約 50%近くの人が、住んでいます。聴覚障がい、視覚障がいのある方とやり取りしながら分かったことは、高齢で一人暮らしの方が多くことです。例えば、元気な家族がいれば一緒に逃げることができますが、老老介護ではないが、80の親と60の障害のある子供であった場合、もう「あきらめ」ている人が結構います。

当事者・家族の声

「あきらめる」理由

「みんなも被災しているのに迷惑はかけられない」と思っています。「パニックになったら、親でないとなかなか対応ができない」「人に迷惑かけるから、それなら、家にいた方がいい」という考えになってしまうのです。

避難訓練に参加しない理由は

当事者家族の声

- 訓練があることを知らない
- 参加しづらい、地域との関係性が薄い

地域の声

- 自分たちの地域に実際に障害者がいるのだろうか
- 障害を知られたくなく、隠している人もたくさんいる。そこは踏み込みにくく難しい

実際の話

参加したら「なんで来たが」と言われたり、「みんなも大変な時だから特別なことはできん」と言われたり「危ないから寄っといて」と言われたり。親の会などでこのようなことを聞くことが

あります。障害があることを知られたくないだけではないのですよね。そういう体験を聞くことで、「やっぱりそうなんだ」、「そんな扱いされるのだ」とあきらめてしまうことがあります。

避難訓練に参加しないというのは、当事者よりも親の方が周りを気にしていることが多いようです。

情報を伝えて安心して参加できる工夫が必要

例えば、聴覚障害の人は外見上から障害があるかどうかわからないので、聴覚に障害があるということを知ってくれているだけで安心できる。と言われます。当事者の方にこのように研究しているということ、県や市町村でマニュアルを作成するようにしていること、地域ではこんなことしているといった情報提供もメッセージになり、安心して参加しやすくなると思います。

当事者・家族の声

参加していく中で腑に落ちていく

このような、研究や調査をしていく中で自閉症協会平野会長も話していますが、「自分も実は参加していないが、やはり参加しないといけないね。そこからが始まりよね」と、腑に落ちるようになってきていると言われていきます。参加しないと情報が入ってこないし、人は情報を入れようとしないうえ、だから情報を常に伝えていく。そうすると「あ、何か自分たちに働きかけをしてきている。伝えようとしてくれている」ということが相手に伝わると思います。

メッセージ

報告書には意識の違いを集計しています。例えば知的障害と発達障害と一緒にされている所があります。明らかに本人たちの意識というものは違います。かといって自主防災の人たちに頑張っ
てねとは言えないです。障害の特性に分けて、共通の部分等、ガイドブックを作成しています。市町村作成の「一般避難所の運営マニュアル」に付随した「(要配慮者特性に応じた支援マニュアル)」です。全部わからなくてもいいのです。表現の仕方を優しい言い方に変え実際に生活の面でどのような困りごとが起こるのか、それにどのように対応したらいいのか、等載っています。
※ニーズ調査の報告書は障害者福祉センターでも貸し出しています。会長 武田 廣一 さん

高知県災害弱者支援センター準備室 杉野修さんにインタビュー

レネー福祉サービスを運営するNPO法人まあるい心ちゃれんじどの応援団が「高知県災害弱者支援センター準備室」を立ち上げました。

高知県災害弱者支援センター準備室

立ち上げた理由

▶災害時における避難行動要支援者名簿作成 対象外になるグレーゾーンの人・災害弱者 とは

高知市は避難行動要支援者の対象者は名簿を作成することになっています。名簿に掲載されていない「支援が必要な人」として把握されない人たちはどうなりますか？ ここはA型就労支援事業所です。ある程度自立した人が多いのですが、災害時に適切な判断が難しく何らかの支援が必要にもかかわらず名簿の対象者ではありません。いわゆるグレーゾーンになるのです。

地域で避難訓練をしたところ名簿に載っている方が自力で避難所に来ることができたという話も聞きますし、名簿に載っているから自力で避難所に来ることができないというわけではないので、名簿に載らないグレーゾーンにいる人たちの掘り起こさないといけない、「災害弱者とは何か？」ということを改めて考えました。

▶グレーゾーンの人たちをどう救うか

災害について「学ぶ場」は命を守るために必要です。例えば地域でされていることを「分かりやすいマニュアル」にしてあげると誰もが理解し参加しやすくなります。ここの作業所の利用者も、知的障害がある人は自分で判断することは難しいですが、わかりやすく指示をすれば、訓練してお菓子を作ることもできます。つまり作業手順をマニュアル化もしくはシステム化することで、できるようになるのです。それは防災も同じことだと考えています。

▶イメージする学習「目黒巻き」を活用してみた

「目黒巻き」とは地震発生前と発生後を時系列にして行動をイメージすることができます。例えば、通勤時間の〇時〇分に災害にあった場合を想定し、避難する場所があるか、時間帯や場所を変え、ここなら避難できるね、など本人と一緒に確認します。家ではタンスやテレビなどが倒れてこないか、寝ている時に地震が起こっても、怪我をしないようにどうしたらいいか、そういうことを本人と学習します。

取り組んでいること

▶今、できることとは

一言でいうと「当事者による当事者のための組織づくり」です。災害時、障害のある人が中心になって活動する、当事者のための災害ボランティアセンターを地域に立ち上げることができたらと考えています。障害を持つ当事者が中心になり運営している組織に、被災障害者支援を目的とした「NPO 法人ゆめ風基金」があります。障害のある人がリーダーとなり、災害時にボランティアセンターを立ち上げ、当事者のために様々なフォローができるよう全国で活動しています。しかし、高知では、みんな切羽詰まっても一歩を踏みださないのが現実です。災害弱者ボランティアセンターを障害のある人たちが本気で考えて立ち上げたら与えるインパクトは大きいと思います。

▶避難訓練で感じること

地域で避難訓練をする際、健常の人が障害者役として訓練をしたりしているが、当事者を堂々と連れてきたらいいと思います。怪我でもして何かあったらいけないので、障がい当事者が訓練に参加したいと手を挙げて、怪我をさせたら責任持てないことを理由に断られたという話もあります。障害のある人、その家族もこのような積み重ねがあるために、なかなか避難所に行くことは、難しいですね。特に顕著なのは精神障害のある家族の場合「近所の人に情報を知られたくない」と思っている人は多くいます。このような状況を理解したうえで、考えないと難しいですね。

▶こんな避難所なら安心できる!!

「あなたは何があったら避難訓練に参加する？」または「避難所に行こうと思いますか？」と聞くと、ある当事者は「例えば『災害弱者センター』と書いてある大きなテントを立ててくれれば、自分たちも避難所に行っても良い居場所がある、ということが分かるのでそれなら避難所に行こうかなと思える」と言っていました。保護者からは、「自分にとって居心地がいいところは、信頼できるコミュニティーなので、『地域』だけでなく、『仲間』というコミュニティーがあるといいなと思います。自分の知り合いに『一緒に行こう』と声をかけてもらえると訓練にも行くのでは」というご意見をいただきました。

これからの防災とは

▶情報のキャッチ（携帯電話、パソコンなど新しいITの活用）

分散型になればなるほど情報をキャッチすること、「自分たちはここにいますよ」と言ったSOSも発信していかないといけないと思います。待っているだけではなく、やはり声を出さないといけない。災害時は給水や配給がどこであるのかといった情報を必ずキャッチできる仕組みは必要だと思います。例えば、高知県立大学の神原咲子教授を中心に平成30年7月豪雨の被災地で被災者支援情報ポータルサイト「まちなび」を立ち上げ、翌年は台風の被災地でも「まちケア」として活用されました。高知でも活用できるように現在準備が進んでいます。情報は地域の人が入力し、ネットで給水場所や配給場所、ガソリンスタンドはここが開いているなどをネットで検索し情報をキャッチできる仕組みです。

▶キャッチした情報を使えるようにする

様々な防災に関するアプリは開発されていますが、これを普及するためには日常的に使えて、緊急になった時にそれが情報の発信としての役割を果たすものになる仕組みでないと、普及しないと思います。障害者だけではなく高齢の人たちにも使えるように学習することが必要です。「あそこに〇〇がある」「これを言っておかないといけない」など良い意味でお節介ができるのは高齢の人だと思います。

メッセージ

障害者は高齢者の先駆者

高齢になって出てくる課題のほとんどは障害者の課題なのです。知的であれば認知の問題、身体であれば車いすなど、視力障害、聴覚障害、実は高齢になって出てくるであろう課題というのは、全て障害者の課題でもあります。障害のある人たちの様々な課題を解決していけば、高齢になったときに必ず助けになる技術というのは出てきます。障害者を特別視するのではなく、彼らの課題を解決するということは、地域や高齢社会の課題の解決に直結すると思っています。

村田一平さんにインタビュー

自立生活センターアライズの代表をしています。当事者3名、スタッフ10名程です。地域の中で自立して生活していける当事者さんをもっと増やしていきたいですね。

障害のある当事者による活動

災害時に向けて、準備していること

▶24時間、呼吸器の電力確保が必要

私の場合、呼吸器の電力供給のため、避難所は難しいと思っています。車の燃料は常に満タンにしています。今はコロナの感染症も心配ですので、災害時は車中泊をするつもりです。

▶自分達のことを知ってもらう活動

私のように介護や呼吸器(電気)が必要な人は、周りの人に自分を知ってもらわないと助けてもらうことは難しいでしょう。なので今いろんな人に、自分や同じような障害のある方を知ってもらう活動をしています。

避難訓練について感じること

地域の避難訓練に参加したことはありませんが、高知県立大学での避難訓練に参加したことがあります。それまで県立大では「当事者にどう対応したらいいのかわからない」という理由で障害のない方が『障害者役』をやっていたそうです。同じ理由で、実際に地域の避難訓練に「参加させてください。」とお願いしても断られるケースが多いです。訓練当日は多くの当事者が集まり、いろんな方に見ていただくことができ当事者が参加することの大切さを感じました。

▶自分達のことを知ってほしいから発信し続けます防災の活動や取り組みの中で、女性防災組織の方、大学で防災に取り組んでいる方、地域の自主防災組織など、色々な方と関わってきました。今後はさらに、一緒にイベントや防災キャンプなどしたいと思っています。実際に助けてくれるのは地域の方なので、これからは僕たちは、地域に災害弱者がいることを知ってもらう普及活動を積極的に新規開拓していきたいと考えています。

「防災」と「目黒巻き」について

目黒巻きとは時系列に災害時の自分の行動パターンをシミュレーションしていきます。行動の仕方、連絡の取り方が生き抜くヒントに繋がっていきます。地震、水害、土砂崩れ、色々な災害のパターンがあります。「防災」というキーワードだけでは漠然としていて、具体的に何を備えたらいいのか分からない。自分の生活や行動範囲の中から、災害と備えの仕方を整理して考えていく。親御さんや施設の支援者と一緒に避難訓練をし、作っていくといいですね。

イメージすることが大事

▶目黒巻きを作る時のコツ①自分が住んでいる所ではどんな災害が起きやすいか。②災害によってどんなことが起こるか。③どう対処すればいいのか。…など、ポイントポイントごとに整理して作っていきます。最初は、一人で作るのは難しいと思いますので色々助言してあげるとイメージしやすいと思います。

※目黒巻きの作成、取り組みは障害者福祉センターの部屋を借りて行っています。ご興味ある方は、見に来てください。

考え方の例

▶筋ジストロフィーの知人の場合 ～水害編～

「1階が水没したら呼吸器がまずだめになるから2階上がらないといけないね。」でも2階に上がれないかもしれない。親も結構歳だし。「じゃあどんな対策が必要になると思う？」一言 僕も目黒巻きを何回もしていますが、正解はありません。出かける時に考えるのです。この辺りは災害起きやすいね、ここで起こったらどうしようかと、日頃考えています。

考え方の例

▶支援者の場合

「私たちはどう動いたら良いのだろうか。施設に戻ったほうが良いだろうか。利用者さんのお家を見に行くべきだろうか。どう助けたら良いのだろうか。」

一言

障害のない方でも災害時にどうするか、考えておかないといけませんよね。正解はなくて、自分達で考えるしかないんですよね。

メッセージ

障害があるからこそ伝えたいこと

障害のある方へのメッセージ

自分の生活を作ることと、防災は「自分の身は自分で守る」という意味から同じだなと思っています。自分のことを考えて発信することで、周りに知ってもらえる。地域の人から気にかけてもらえる人が一人でも増えれば、助かる確率が高くなると思います。

自立した生活を考える

病院や施設、親元で生活をしていると、「自分はこうだ」と意見を言う機会が無くなっていく方もいます。僕も昔はそうでしたから。もし今その状況に置かれている方がいたら、一人で「頑張れ」とは言いません。アライズに繋がってくれば、「一緒に頑張っていこう」と言えます。地域の中で自立して生活していく仲間をもっと増やしていきたいですね。親は先に年老いて亡くなります。いずれは地域に出て自分で暮らしていけるようになったほうがいいですね。

地域の方、支援する方へのメッセージ

地域の方には、周りに自分たちのような障害を持った人がいることを知ってもらいたいというのが一番の思いです。それには自分たちも発信していかないといけません。僕のところには、平成福祉専門学校の方もアルバイトにきており、僕を知っている方は増えてきています。支援する方もどこまで支援するかが、難しいと思いますので見て知ってほしいです。うちではアルバイトさんのお仕事見学もやっています。

誰一人とりのこしたくない！地域の思い

初月地区

初月地区防災連合会長 松下潤一さんにインタビュー

要支援者名簿の情報提供に同意された方に対して個別計画を100%達成。個別計画の実効性を検証するために障害のある方も含めて実際に避難訓練を行っている。

_Q1 情報開示の同意を得られた人全員の個別計画作成のポイントなど教えてください

▶縦割りをなくした

地域の縦割りをなくし4団体（防災連合会、町内会連合会、民生委員・児童委員協議会、地区社会福祉協議会）との協働が成功のカギとなっていますね。

▶「支え合いマップづくり」から見えてくる

例えば、支え合いマップは民生委員さんが作成するものという概念が定着していますが、町内会でも広げていこうと、地域の4団体と協力し、「支え合いマップづくりの学習会」や、町内会長も1件1件訪問してマッピングを行い、このマッピングを基に個別計画を作成しました。支え合いマップづくりでは、同意を得られた人の個別計画を作成するだけではなく、同意していない人への対応もできますので、結果的に地域全体での認識を高めていくことに繋がりました。

▶支援できる人が少ない

支援者が不足しています。2019年時点での名簿情報開示の同意者770名の内、614名が75歳以上のほぼ元気な高齢者です。避難の際、誰かの助けが必要な人に支援が行き届くよう、要支援者ではありますが、支援者になってもらえるのではないかと考えています。

Q2 避難訓練について教えてください

▶障害のある人も一緒に避難訓練

要支援者と支援者を対象に、小学校2年生の肢体障害の女の子や自閉症の方も一緒に避難訓練をしました。(2019年初月地区の9つの町で実施)

▶接し方が分からないという課題

支援する人が「どのように対応したらいいのか、わからない」という声がやはり多いです。市でプラットフォームを整え対策を考えてくれると、障害のある人もみんなが安心できると思います。初月地区防災連合会 避難訓練の様子

メッセージ

これからの避難所について

昨今の新型コロナウイルス等の感染症への対策も考慮した場合、収容人数が減り、避難者全員の収容が難しくなり、要支援者にとっては、関連死も懸念されるため、一番は在宅避難が有効だと考えています。やはり「自助」が大事避難所の分散を考えると「避難所へ行く」という概念から「避難を支援する拠点」へと考えることも必要かと思えます。そのためには、普段から自宅に備蓄品をそろえておくこと、家具転倒防止策をとっておくことなど、「自助」でできることをするのは大事だと思います。

北高見町北高見町内会長 濱渦修一さんにインタビュー

6年前に「こうちノーマライゼーションVo137」特集“南海地震に備える”でインタビューした北高見町のその後。

Q1 要支援者名簿にない方で支援が必要と思われる人の名前が挙がることはありますか？北高見町は町内会と自主防災組織が同じなので、月に1回の定例会で防災の話ができるという利点があります。そういう方がいるという話は聞きますが、多くは町内会員になっていないのが現状です。

▶会員になっていない人にも知らせる！

町内会員になっていないと顔が見えず、地域の情報も届きにくくなります。しかし、町内の住民ですから町内の動きはとにかく知らせる！逆に「知らない」と言われたいように思うくらいの気持ちですね(笑)北高見町は回覧板を廃止にしました。途中で止まったり、回覧のお知らせが何枚もあると読んでいないこともあるので、回覧の内容を町内会便りに落とし込み全戸に配っています。

Q2 障害に限定することではないと思いますが、支援が必要な人に対してどのような取り組みをされていますか？

▶いざという時は知らせてほしい

避難時に支援が必要な人はどのように知らせたらいいのか、町内会でも意見が出たので、名簿に掲載されている要支援者全員に緊急用の笛と防寒・保温アルミシートを配布しました。日頃からつながりを大切に情報収集と連携はしていきますが、100%把握することは個人情報のこともあり難しいです。だからこそ、いざという時は支援が必要な人も「助けて！」と人に知らせる行動も大切だと思います。

▶できることをひとつずつ

町内会でも自分たちができることは何か話し合い、緊急時の備えとして救急医療情報キットを配布したり、できることをやってきました。車いすで避難できるルートと場所の整備もしました。例えば、避難所は4人で抱えないと上がれない場所、2人で上がれる場所、電動車いすなら上がれる場所を確認し、さらに車いすを抱えて上にあげる訓練もしています。

Q3 障害のある方が避難訓練に参加されたことはありますか？

▶参加してもらえよう声かけをしています…避難訓練は年1回やっています。障害のある方とか、歩行が困難な方とか声かけはしていますが、なかなか出てきてはくれないですね。避難訓練には車いすの人もいます。ただ、知的障がいや精神障害のある方の情報がないので、こちらから踏み込んでいくことは難しいです。「町内会便り」を全戸に配ることは、町内会で把握しきれていない支援が必要な人にも情報が伝わるものだと信じています。

Q4 SNSを活用した広報手段は考えていますか？

▶紙媒体の良さ

以前はHPを考えましたが、管理できる人がいないのであきらめました。HPを見る人と見ない人、携帯もスマートフォンの人は増えてきましたが、全員ではないです。情報を得るために自分からアクセスしていかなくてはならないけど、毎月このように「町内会便り」が届く紙媒体の方がやはり確実かな。正直、毎月、大変ですよ。(笑)町内会には若い方も出てきてくれますが、引き受けてくれる人がいないので、何か良い案がないか模索しています。

町内会便り避難ルート

下知地区

下知地区減災連絡会事務局長 坂本茂雄さんにインタビュー

障害者施設「すずめ共同作業所」の家族会との防災活動の取り組み「SOSカード」「防災カード」の紹介事

Q1 地域にある障害者施設「すずめ共同作業所」と共同で実施している防災について教えてください

さい。

▶一緒に訓練するようになったきっかけ

下知地区にある減災連絡会の資料印刷を「すずめ共同作業所」へ依頼していたので、作業所の職員と「地区防災計画」の話をしたことがきっかけです。地区防災計画の中に「福祉の視点を持ち込んでほしい」と言う職員の思いがあることを知り、計画作成にあたりメンバーとして参加してもらいました。施設を利用されている家族会からも「地域の人と防災のことをやりたい」と声が上がり、防災について一緒に取り組んでいくことになりました。

▶施設の訓練を見学して分かったことは

まずは、「すずめ共同作業所」の訓練を見せてもらいました。軽度の障害のある利用者が重度の障害のある利用者を支援する状態で、「これは大変だな、誰かの支援がなければとてもではない」職員だけでは手が回らないということを目の当たりにし、地域も連携できたらと考えるようになりました。

▶家族会の思い、地域の人々の思い

家族会と一緒に議論していくなかで、気持ちの変化が見えてきました。はじめは「自分たちのことを地域に明らかにしていくこと」「自分たちの困りごとを地域に言うことはどうなのか」「迷惑になるのではないか」との意見はありました。しかし勉強会を重ねるうちに「やはりそこは知ってもらわないと支援を受けることができないよね」「障害の理解」から知ってもらいたいという前向きな思いに変わっていきました。実は、避難行動要支援者対策が始まり個別の支援計画の作成が始まったころから「障害の理解」は大切だと考えていましたので、支援する側もされる側も同じ思いだということが分かりました。その後、すずめ共同作業所の施設長、市の職員、減災連絡会のメンバーでワークショップをして、話し合っていくようになりました。

「障害の理解」が大切だと痛感したできごと

要支援者の方も参加している訓練をした時の話ですが、運営側は要支援者がどなたなのか分かりません。私が大きな声で呼びかけたら、ある子供さんがものすごく怖がったのです。あとから聞くと、実は発達障がいがあり、大きな声に過敏に反応してしまったそうです。知っていたら対応の仕方があるのですが、「知らない」とパニックにさせてしまうことがあるのだと痛感しました。

▶災害時に役立つオリジナルなカードの紹介《すずめ共同作業所のSOSカード》 支援を受けやすくすること 支援者を増やすこと

障害の特性やニックネームなど書いたカード（A4）を一人一人作り、ビブスの後ろに挟んでいます。ビブスは作業中も着用しています。例えば、「ゆきさん 一緒に逃げましょう」と声をかけることで、その人の行動を促そうとするものです。人によって声をかけるキーワードが違うので、

周りの人も声をかけやすくなります。この「SOSカード」は個別計画にもなるかと思っています。

《下知地区防災カード》避難所での受付をスムーズにするために考えられたカードで、このカードを身に着けている場合は何らかの支援が必要な方であることが一目で分かるようにしました。他の施設や地域などでも、オリジナルの「SOSカード」や「防災カード」を作ることでもできると思います。

Q2 障がいのある方と一緒に取り組んでいくには？

施設にいる間は施設で命を守ってもらえる。家に帰ればその地域のの人に守ってもらうことになります。もう一歩踏み込めないかなと思うことはありますね。ケアマネなどの支援者による聞き取りで個別計画を作成していく動きも出てきています。地域の防災会にも繋いでくれたら積極的に一緒に対応策も考えていけます。私たちも専門知識を聞きながら考えていかないと、自分たちだけではできないと思います。本人はもちろん支援者や施設も含めた繋がりが重要です。

▶避難訓練で感じること

下知地区は津波警戒地域ですので、レベルの高い「条件付与型訓練」をしてきました。これは市の職員指導の下、その場で条件が付けられ適宜対応していく訓練です。お互いにつながるために、ハードルを下げた訓練も行っています。起震車で揺れの体験をしたりイベントを開催したりしました。イベントには、「すすめ共同作業所」にもブースを出してもらいました。

メッセージ

これからの方向性

下知地区は津波浸水地区で20分～30分で津波がきますので、家の中まで入って助ける時間がないかもしれない。まずは外に出てきて欲しいです。「出てくるにも出てこられない人もいないのか」といった声もあります。

「自助」としては家具転倒防止や耐震化等があります。阪神淡路大震災の時のようにみんなで家具を持ち上げたりしていたら津波に飲み込まれてしまうリスクは減らせます。

「共助」として、下知地区では防災講演会や訓練のときに市の職員も来ていますので、補助制度の申請手続きをその会場でできるような体制をとりました。個人で手続きするよりは、その場で手続きができればいいですね。つまり「自助」だけではできないけど「共助」が後押しすることで「自助」の完成形に繋がります。

障害のある方が参加しやすい工夫

スロープがない避難所が下知地区にもあります。スロープを設置するには費用面やスペースの問題もあり簡単ではないため、その代わりとなるエアマット式担架を避難所に準備しました。スロープのない避難場所でも避難をあきらめないでほしい。しかし重度の障害で電動車いすの場合は

エアマット式担架では難しいので、そこは課題だと思います。身近にニーズがあるのでそれに応えられる開発が進んでくれたらいいですね。

高知市の避難行動要支援者対策

災害時に避難支援を要する方を「避難行動要支援者」と定義

東日本大震災では、多くの高齢者や障害者、避難支援に当たった地域の支援者が犠牲となりました。このことを踏まえ、高知市でも名簿を作成し、災害時に避難支援を要する方の命を守るための体制づくりを進めています。

名簿は、対象者の同意を得た上で地域の支援者に提供することにより、日頃からの見守りや災害時の避難支援のための個別計画の作成、また、訓練実施により災害時の声かけや避難支援のために作成しています。

名簿の対象者は、生活の基盤が自宅にある以下のア～クの方です

- ア 75歳以上でひとり暮らしの方
- イ 75歳以上の方のみで構成される世帯の方
- ウ 要介護認定3～5を受けている方
- エ 身体障害者手帳1・2級（総合等級）を所持する方
- オ 療育手帳Aを所持する方
- カ 精神障害者保健福祉手帳1級を所持する方
- キ 日常生活において部分介助及び全面介助を要する在宅難病患者
- ク 上記以外で特に支援の必要がある方

避難行動要支援者対策の推進には、地域の支援者に加え、介護サービス等により、日頃から避難行動要支援者の様子がわかる介護・障害福祉事業所を含む関係者との連携が必要と考え、令和2年度は、

新たな仕組みでモデル地区を設定し個別計画作成に向けた取り組みを行いました。

種崎地区防災&支え合いマップ作成の様子

名簿対象者の質問

Q 名簿が悪用されることはないですか？

A 名簿情報は避難支援の目的のみに利用します。個人情報の漏えいや紛失等がないよう、提供先と協定を締結するなどして、適正な管理をします。

Q 個別計画を作れば必ず助けてもらえるのでしょうか？

A 避難支援者も被災することもあるので必ず支援を受けられるとは限りません。自分の身は自分で守る意識を持って、日頃からコミュニケーションをとることなど心がけてください。

支援する人の質問

- Q 名簿にはないが載せた方がいいと思われる方がいる場合はどうすればいいですか？
- A 市へ連絡をお願いします。市から本人へ名簿に関する情報など説明し意思確認を行います。
- Q 避難支援者にはどのような義務や責任が発生しますか
- A 避難支援者は、善意と地域の支え合いで行っているものであり、災害時に避難支援ができない場合責任が伴うものではありません。ご自身やご家族の安全を確保したうえでできる範囲で避難支援をお願いします。

お問合せ先 高知市 防災対策部 地域防災推進課 ☎088-823-9040

令和3年度障害者福祉センター
年間行事カレンダー（2021年4月～2022年3月）
高知市社会福祉協議会 障害者福祉センター
住 所：高知市旭町2 丁目21-6
電 話：088-873-7717
FAX：088-873-6420E-mail：asahi@kochi-csw.or.jp

（通年）2021年4月～2022年3月 出張手話講座 高知市在住または在学、在勤で10名以上のグループや団体 募集締切：派遣希望日の30日前までに 開催場所：申込みをされたグループ、団体でご準備をお願いします

2021年5月29日（土）午前10:00～12:00 自動車運転支援者講座 作業療法士等、自動車運転に係る支援者の方 募集期間：4月12日（月）～5月12日（水） 開催場所：高知県運転免許センター

2021年5月29日（土）午後13:00～16:00 障害のある方の運転教室 18歳以上で高知市在住の肢体に障害のある方 募集期間：4月12日（月）～5月12日（水） 開催場所：高知県運転免許センター

2021年6月19日（土） 10:00～12:00 パソコンのエクセルで 絵を描こう！体験教室 小学生以上で高知市在住の障害のある方（マウス操作が可能な方） 募集期間：6月1日（火）～16日（水） 開催場所：高知市障害者福祉センター

2021年7月17日（土） 13:30～15:30 はじめての頭脳スポーツ（将棋）体験教室 小学生以上で高知市在住の障害のある方 募集期間：6月1日（火）～7月9日（金） 開催場所：高知市障害者福祉センター

2021年8月4日(水)～8月27日(金)水・金曜日(祝日を除く)全8回18:30～20:30 はじめての手話講座(夜コース)小学生以上で高知市在住または在学、在勤の方 募集期間 : 7月2日(金)～21日(水) 開催場所 : 高知市障害者福祉センター

2021年8月28日(土) 13:00～16:00 作る!楽しむ! プラモデル教室 小学生以上で高知市在住の障害のある方 募集期間 : <障害のある方> 7月12日(月)～8月23日(月)※ <一般> 8月10日(火)～8月23日(月)※定員に空きがある場合のみ 開催場所 : 高知市障害者福祉センター

2021年10月23日(土)午前10:00～12:00 自動車運転支援者講座作業療法士等、自動車運転に係る支援者の方 募集期間 : 9月15日(水)～10月8日(金) 開催場所 : 高知県運転免許センター

2021年10月23日(土)午後13:00～16:00 障害のある方の運転教室18歳以上で高知市在住の肢体に障害のある方 募集期間 : 9月15日(水)～10月8日(金) 開催場所 : 高知県運転免許センター

2021年11月20日(土)10:00～15:00 第5回障害者福祉センター文化祭 どなたでも参加可実施予定行事・作品展、屋台コーナー・陶芸素焼き皿絵付け体験・プラモデル作り体験

2021年12月18日(土)10:00～14:00 障害のある方のクリスマス料理教室 高知市在住で障害のある方 募集期間 : 11月5日(金)～12月3日(金) 開催場所 : 高知市障害者福祉センター

2022年1月22日(土)13:00～16:00 障害のある方の「防災講座」小学生以上で高知市在住または在学、在勤の方 募集期間 : 12月6日(月)～1月14日(金) 開催場所 : 高知市障害者福祉センター

2022年2月3日(木)～28日(月)各月・木曜日(祝日を除く) 全8回 13:30～15:30 はじめての手話講座(昼コース)小学生以上で高知市在住または在学、在勤の方 募集期間 : 1月6日(木)～24日(月)開催場所 : 高知市障害者福祉センター

2022年3月5日(土)10:00～12:00 障害のある方を支援するボランティア体験 高知市在住で障害のある方の支援活動に興味・関心のある方 募集期間 : 2月1日(火)～18日(金) 開催場所 : 高知市障害者福祉センター※開催予定は変更になる場合があります。

ほっこりエピソード

私は四肢障害。ある日バスに乗車。すると空いている席が一番後ろだけ。「移動がしんどい」と

思ってたところ、入り口付近に座っていた学生がスマホを触りながら、後ろの席に移動してくれた。その温かい心遣いにほっこりしました。

編集後記

■「天災は忘れた頃にやって来る」よく聞く言葉ですが、どのように来るかのイメージが、映像でしか浮かばないのは、私だけでしょうか。経験することで見えてくるものが、沢山あります。誰かが言っていました。「何事も、やってみなくちゃ分からない！」(セ) ■誰一人取り残さないために何が 필요한のか、支援が必要な方と支援する方の想いに触れる機会になりました。(昌) ■今号を手にとられた、一人でも多くの方に、防災を考えるきっかけになってほしいとの思いを込めて作成しました。障害のある方も、障害のない方も一緒に取り組んでいただけたら嬉しいです。(松) ■いつ非常事態に陥るかわからない昨今、万全な準備を備えておかなければと思いつつ、なかなかできていない(川)である。(川) ■先日の 避難訓練 体固まる いざという時どうなることか。(吉) ほっこりエピソード開催予定日・期間行事名称対象備考(募集期間・開催場所)

ほんとうにあった障害者あるある4コマまんが

絵：高知大学教育学部附属特別支援学校 中学3年生の皆さん

心はバリアフリー～ある視覚障害の人の話～

ある日、車いすの人がインターネットで調べたバリアフリーの施設へ

車椅子で大丈夫だな！

見えてきたあの建物だ！

目的地

到着！と思ったら入口が階段だった・・・

すみません

車いすの人に気づいた従業員は、抱えて階段を上がりました

ありがとう

いえいえこちらこそすみません

その後、施設の入口にスロープが設置されましたとき

絵：石建 未琴さん(高知県立盲学校)

いただきます！

～ある視覚障害の人の話～

ある日弱視(ロービジョン)の人がバイキング形式のお店へ

おなかすいたなあ何を食べようかなあ

この触感はいももち！大好きなんだよね♪たくさんとろうー

いただきま〜す。

す・・・すっぱい

まるくて大きな梅干しだったのね

もし。あれ？と思う場面を見かけたら声をかけてあげたいですね

同封しておりますアンケートにご協力ください。

お答えいただいた方の中から抽選で10名様に、高知市社会福祉協議会キャラクター「ほおっちょけん」のオリジナルハンカチをお送りします。

※当選は発送をもってかえさせていただきます。

発行 高知市社会福祉協議会 障害福祉センター

〒780-0935 高知市旭町2丁目21番地6 [URL:http://www.kochi-csw.or.jp/](http://www.kochi-csw.or.jp/)

TEL: 088-873-7717 FAX 088 -873-6420 E-mail:asahi@kochi-csw.or.jp

障害者福祉センター宛 FAX 088 -873-6420

こうちノーマライゼーション 読者アンケート

この度は、「こうちノーマライゼーションVol.46」をご覧いただき、ありがとうございます。今後のよりよい紙面づくりのために、アンケートにご協力をお願いいたします。以下の質問にお答えいただき、FAXまたは郵送にて当センターまでご送付ください。抽選で10名様に障害者福祉センターオリジナルほおっちょけんハンカチをお送りいたします。なお、当選は賞品の発送をもって代えさせていただきます。

受付期間 令和3年12月末

- (1) 住所・氏名・連絡先を教えてください。(賞品をご希望でない方は未記入でも結構です。)

住所 〒

氏名

連絡先 ☎ ()

- (2) 年齢を教えてください

10歳代以下

20～30歳代

40～50歳代

60歳代以上

- (3) 本誌をどのようにして知りましたか。

- 学校・職場
- 市役所等の窓口
- 病院・施設の窓口や待合所
- その他

(4) 本号で興味深かった記事を教えてください。(複数回答可)

- 高知県・障害のある人の防災ニーズ調査
- 高知県災害弱者支援センター準備室
- 障害のある当事者による活動
- 誰一人とり残したくない！地域の思い
- 高知市の避難行動要支援者対策
- ほっこりエピソード
- ほんとうにあった障害者あるある 4コマまんが

(5) 本誌へのご意見・ご感想、今後希望される特集・テーマ等がありましたら、教えてください。

*本アンケートでご記入いただいた内容は、障害者福祉センターの事業に関わる目的のみに使用し、他の目的には使用いたしません。

送付先

高知市社会福祉協議会 障害福祉センター

〒780-0935 高知市旭町2丁目21-6

ファクス：088-873-6420

ご協力ありがとうございました。